

新約聖書に於ける時の觀念

小 田 丙 午 郎

*οὐκ ὡς οἱ εὐαγγελισταὶ ἡρώδης ἢ καί ποτε οὐκ ὁρατὴρ εἶδεν οὐ
τῇ ἰδίᾳ σέσωκα.*

時期や場合は父がご自分の權威によつて定めて居られるのであつて
あなたがたの知る限りではない。使徒行伝一、七

一

ナザレのイエスは磔刑に処せられた。これは彼の生涯の最高潮であつた。かかる見地に立つてイエスの受難の描写に力を注いでいるのは紀元六十年前後にローマ在住の基督者を対象として書かれたマルコによる福音書である。

マルコによる福音書を資料にしてこの著者を補足また敷衍したマタイ・ルカはイエスの受難の記事よりもむしろ復活のそれを強調しているように思われる。マタイが書いたと云われるマタイによる福音書またルカの作であるルカによる福音書は原史料を共通にするところから共観福音書 (Synoptic gospels) と呼ばれている。ルカは福音書すなわちイエスの生涯更に詳しく云えばその誕生から十字架の死とそれに引続く復活

の記事の後にその昇天とその後の彼の業を誌した。これはルカによる福音書^{註一}の後の書である使徒行伝である。

註一 使徒行伝一、一

二

使徒行伝が書かれた年代は七〇年から八〇年の間であらう。三〇年から四〇年の間にイエスの十字架の処刑が行われ三日目に彼が死人の中からよみがえったとは共観福音書の一致した記事である。

イエスの十字架の死とその復活の信仰の上に教会 (ἐκκλησία) が誕生した事は教会史家がひとしく承認する所である。

使徒行伝によればイエスが復活後四十日目に昇天した。

昇天^{註一}後五旬節の日^{ペンテコステ}に聖霊が降臨し、この日を境に信徒はエルサレムからユダとサマリヤの全土それから小アジア最後にローマにイエスキリストの証人としてその救いのおとずれを宣べた。

ローマに基督教が伝わったのはいつであつたらうか。ローマ人への手紙がパウロによつて認められたのは五十六年とされているところから察

すれば五十年には既に基督教はローマに伝播していたのではなかったろうか。

ローマは当時の世界であった。

キリスト教の発祥はエルサレムに於てであり、それは五旬節に溯源される。

わたくしたちが五旬節のエルサレムに於ける聖霊降臨の記事によって原始キリスト教会の実状の一端に触れる事が許されるであらう。

この記事によればこの日地上さながらに天国を顕現した。すなわちキリストの前に信徒は国籍を忘れた。讚美は期せずして信徒の口から迸り出た。祈は彼らの糧となった。彼らは一切の持物を共有した。この光景は使徒行伝の記者には美わしいものであった。

さてエルサレムには天下のあらゆる国々から

信仰深いユダヤ人たちがきて住んでいたが、この物音に大ぜいの人が集つてきて、彼らの生れ故郷の国語で使徒たちが話しているのを、だれもかれも聞いてあつけに取られた。使徒行伝、二六

五旬節に於ける信徒の美わしい生活様相は

一般世人には正気の沙汰ではなかった。「あの人たちは新しい酒で酔っている二、二三」使徒行伝の著者はしかし同信の立場をペテロのヨエルの預言によって弁護する。

彼等の異常な行状は

神がこう仰せになる。

終りの時には

わたしの霊をすべての人に注ごう。二、一七

新約聖書に於ける時の觀念

使徒たちはイエスの復活をあかしした。

彼等はイエスの復活更に厳密に云えば復活したイエス即ちキリストを目撃した。

彼等はこの証人としてキリストによる罪の赦を人々に説いた。

使徒たちの宣教によってその日三千人ほどの改信者があつた。

註一 Pentecost ユダヤの三大大祭の一つ、レビ記二三、一五―一六

三

人は十六世紀のヨーロッパの宗教改革を以て原始キリスト教会への復帰と云う。

これは宗教改革の本質に触れた命題である。

しかしこれは宗教改革の本質を道破しないばかりか原始キリスト教会を理想化する誤謬を冒すのではあるまいか。

一般に人が基督教と云えばイエスキリストによる罪の贖いを連想する。原始キリスト教会の信徒を支配したものは贖罪の信仰であつたであらうか。

わたくしたちはこれに対し否と云う理由は少しも見出されない。

しかしわたくしたちはここに一事を明にしなければならぬ。それは原始キリスト教会の贖罪の信仰は宗教改革時代のルター・カルヴィンのそれとはその性格と色調とを異にするものであつた。

原始キリスト教会の信仰の中心となつたものは贖罪よりもむしろ待望 (ἡ ἀπορία) イエスキリスト再臨への待望であつた。

少なくともわたくしたちが原始キリスト教会に於ては待望が贖罪に優

先していたと云う事を許されるであろう。

この事は新約聖書の各書が証明している。

四

使徒行伝の記者は五旬節の使徒の状態を美わしくも描いている。

しかし彼は五旬節当時の信徒のあり方を肯定しているであろうか。

五旬節当時信徒たちは持物を共有した。二、四三—四六

これはいつまで続いたであろうか。

アナニヤとその妻サツピラが早くもこの裏切者としてあらわれた。

(五、一一—一二)

使徒と信徒たちをつなぐものはキリストにある信仰の兄弟関係であった。

しかしアナニヤとサツピラの事件に於てわたくしたちが見るものはペテロのカリスマ (charisma) 的支配者である。

兄弟たちよ。主イエスキリストの名によってあなたがたに命ずる。

怠惰な生活をして、わたしたちから受けた云伝えに従わないすべての

兄弟たち遠ざかりなさい

わたしたちにどうならうべきであるかは、あなたがた自身が知っているはずである。

あなたがたの所にいた時にはわたしたちは怠惰な生活をしなかったし人からパンをもらって食べることもしなかった。テサロニケ人への第

二の手紙三、六

テサロニケ人への第一の手紙はパウロの初期のものと云われる。この

著作年代は五十年頃であるとされている。

この第二の手紙は第一のそれ直の後に書かれた、この手紙は再臨信仰者の墮落面を衝いて余すところがない。

五

五旬節を契機に誕生した原始教会には現世はさながら神の国であった。併し彼らにさながらの神の国は早くも幻滅に帰した。

人の子は父の栄光のうちに、御使たちを従えて来るが、その時には実際のおこないに應じて、それぞれに報いるであろう。よく聞いておくがよい、人の子が御国の力をもって来るのを見るまでは、死を味わわない者が、ここに立っている。マタイによる福音書に一六、二八

既にイエスは世界在世中にその再来を予告した。しかもその再来は文字通りの短日月の様な感を与えた。キリストの再来はしかし信徒の焦眉の待望に應えなかった。

主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか。

使徒行伝一、六

信徒はユダヤ人であった。彼らが復活のイエスに期待したのはユダヤのメシヤとしてイスラエルをローマの支配から解放する事であった。がユダヤはローマの支配から解放されるどころか七〇年にエルサレムが滅ぼされた。

一方信徒はイエスの復活の霊眼による解釈者また洞察者であるよりはむしろ肉眼による目撃者また直観者であった。

また彼らは事象の即事的な感動者であって、対事的な観想者ではな

った。

云わば彼らの時 (*Kairos*) に於ける把握は所謂經過連続そうして変化のギリシヤ的な自然的なものをどれだけ克服したのであろうか。

時は神の支配にある。これはユダヤ的否キリスト教的時間である。

愛する者たちよ。この一事を忘れてはならない。主にあつては、一日は千日のようであり、千年は一日のようである。ペテロの第二の手紙三、八

この手紙の発信者ペテロはエルサレム教会の柱石であつた。彼がこの手紙を認めたのはその死の直前であつたとすれば、この一節は彼の救の時の把握に対する飛躍^{註一}の告白でもなからうか。

註一 ペテロの第二の手紙三、一五—一七にはパウロの手紙の難解を示唆している。

六

原始キリスト教徒への迫害者はサウロ後のパウロであつた。パウロがキリスト教徒迫害の絶頂に達した時、彼はダマスコ途上で復活のキリストと出会の経験をした。

これは使徒行伝の記者は誌し彼自らも告白するところである。これは正しく彼の生涯の大異変^{キリストの}であつた。

彼はダマスコ^{註一}途上のキリストの出会の経験に於て自ら即事的な目撃者また直観者たるに留らなかつた。彼はこの際自らを対事的な観想者また洞察者まで高めたのであつた。

彼はまた事象に対する妄我的陶醉者に甘んじないで冷静な反省者とし

て終始した。

彼は更に此の個人的体験を普遍的救済に溯源した。

彼は自ら神のキリストイエスによる福音の使徒と称した。そうして後人が彼に基督教創始者の榮譽を附するのにも決して意味のない事ではない。

註一 使徒行伝九章

七

わたしが最も大事なことであつた。すなわちキリストが聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだことそして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり三日目によみがえつたことケバに現れ次に二人に現れたことであつた。そのうち五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠つた者もいるが、大多数はいまなお生存している。そのうち、ヤコブに現れ、次にすべての使徒たち^{註一}に現れそして最後にいわば月足らずに生れたわたしにも現れたのである。コリント人への第一の手紙一五、三—八

以上はパウロの真作とされる五五年頃書かれたコリント人への第一の手紙の一節である。これはイエスの復活の歴史的事実の系譜である。これは彼が使徒として信徒への証しである一方、自らの反省から確信、確信から決断への課程を示すものではなからうか。

更にこの一節に彼がイエスの復活の目撃者であるとしている所から察すれば、彼はこの復活の目撃者たちまた証人の最後の止揚としての自覚を歌っているのではないか。

既に述べたようにダマスコ途上に於けるキリストとの出会の経験は彼に一大異変であつた。

人は一大異変に際し驚異し自失する。

しかし一大異変とは何であらうか。

人がこれを冷静に反省しその由来を究明する時、彼はその実体を理解しそうして絶望を希望へ転ずる。

パウロのこの一大異変に対処したのは詩的陶醉ではなく、歴史的探究であつた。

そうしてその探究の手懸を彼に供したものは、否規準となつたものは旧約聖書であつた。

彼は旧約聖書を一点一画を誦んじていた、

しかしそれは歴史的探究に迫られた自由なる希求からではなく、パリサイ人として縛られた伝承的学風に於てであつた。

ダマスコ途上のキリストとの出会はパウロをして伝承的学風に袂別させた。

旧約聖書は彼に神の救済史となつた。

彼に取つての一大異変は神の救済史の連続の一環に外ならなかつた。

そうしてこれは義人ナザレのイエスの十字架の死と復活の一大異変は永遠の神の救済史の完結であつた。

主はわたしたちの罪過のために死に渡され、わたしたちが義とされるためによりがえされたのである。ローマ人への手紙四、二五

パウロに先じたキリストの証人たちは單純にイエスの復活を目撃者として証した。彼らはしかし復活と云う事象に秘む意味の解釈者ではあ

り得なかつた。

八

パウロは自ら告白しているように罪について曾つて人類が悩んだ苦悩の体験者であつた。彼がかかる罪の苦悩から解放されたのはイエスキリストによつてであつた。ローマ人への手紙七、二五

罪からの解放——これは何を意味するのであらうか。これはパウロ個人の救に限定されるであらうか。

パウロはパリサイ人としてその昔ヤハウェがその選民イスラエルと契約したモーセの律法の一点一画まで遵奉した。

パリサイ人にはモーセの律法を遵守してそれによつてイスラエルが救われるすくい条件であつた。

パウロにはしかしイスラエルにとっての救である律法こそその罪の証左であつた。

イスラエルの聖なる律法こそ実は罪の指摘者であつた。

パウロによれば罪のゆるしとは神の律法の撤回であつた。云いかえればイエスキリストは律法の終末であつた。ローマ人への手紙一〇、四

更に別言すれば神はイエスキリストによつて新しい契約を人類と結んだのであつた。

神はわたしたちに力を与えて、新しい契約に仕える者とされたのである。コリント人への第二の手紙三、六

新しい契約 (καινὴ διαθήκη) なる語が始めて用いられたのはパウロによつてであると云われる。パウロにはイエスキリストは新しい時の

創造者でもあった。

九

なお、あなたがたは時を知っているのだから特にこの事を励まねばならない。すなわち、あなたがたの眠りからさめるべき時がすでにきている。なぜなら、今はわたしたちの救が初め信じた時よりもっと近づいているからである。ローマ人への手紙一三、一一
私はこう言われる。

「わたしは、恵みの時にあなたの願を聞きいれ、救の日にあなたを助けた」

見よ、今は恵みの時、見よ今は救の日である。

コリント人への第二の手紙六、二

パウロには今は新約の時代すなわち恵みの時であった。この事は他面今は終の時ではなかった。彼には終の日が待っている。その終の日——この日キリストの審きが不信の徒にそうして救が信徒に及ぶのである。

審きに対する恐怖とそうして救に対する希望との緊張の中にパウロはその生涯の馳場を走ったのであった。ピリピ人への手紙三、一三—一六

パウロはキリストにあって救われた。

しかしその救は未完のものであった。

わたしたちは、この望みによって救われているのである。しかし目に見える望みは望みではない。なぜなら現に見えている事をどうしてなお望む人があろうか。ローマ人への手紙八、二四

彼には救の成就はその日である。そうしてキリストの日は彼にも亦焦

新約聖書に於ける時の観念

眉に迫っている。

兄弟たちよ。わたしの言うことを聞いてほしい。時は縮まっている。

コリント人への第一の手紙七、二九

一〇

パウロはエルサレム教会と袂を別って、小アジアのヘレニズム文化社会に伝道の分野を拓いた。この事は併しパウロと原始キリスト教会との遮断を意味するものではない。

パウロとエルサレム教会との相互交流によって、使徒たちがパウロに影響された事は想像されて誤らないであらう。

既に述べたようにパウロはイエスの死と復活とを解釈した。彼によって救済史は旧と新とに分たれた。これは云わば旧約時代に於けるイスラエルの選民の喪失であった。

あなたがたはみな、キリストイエスにある信仰によって神の子である。キリスト合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。もはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリストイエスにあって一つだからである。もしキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのである。

ガラテヤ人への手紙三、二六—二九

イスラエルの祖先はアブラハムであった。

ヤハウエがそれと契約を立てたものはアブラハムの子孫であった。イエスキリストにある新しい時代に於てはアブラハムの子孫とはその血族

性を意味するものではなくなった。

新しい時代に於けるアブラハムの子孫とはアブラハムと靈性すなわち信仰を同じくする者の謂である。

イエスをユダヤ人の待望したメシヤと云う角度からイエスの生涯を描いたものはマタイによる福音書である。この福音書の著者はナザレのイエスの弟子マタイであると云われる。

マタイはこの書の始に綴るものはアブラハムの子、ダビデの子、イエスキリストの系図である。

しかしマタイは

『主はわが主に仰せになった。

あなたの敵をあなたの足もとに置くとしまではわたしの右に座しなさい』

このようにダビデ自身がキリストを主と呼んでいるならキリストはどうしてダビデの子であろうか。マタイによる福音書二三、四五—四六と云うイエスの言葉を引用している。

これはパウロの表現を借りると、

御子は肉によればダビデの子孫から生れ

聖なる靈によれば死人の復活により御力をもって神の子と定められた。

ローマ人への手紙一—三

の転釈に似ていのではないか。

イエスは神を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と呼んだ。

これは深甚な注意を以て読まれなければならない。人が若しこの神の図式を

神——アブラハム——イサク——ヤコブ

と規定するならばイスラエルの神はイスラエルの祖神となるであろう。イスラエルの神ヤハウェはしかしイスラエルの祖神ではない。

従つてわたくしたちはこの神の図式を左の如くしなければならない。

神——アブラハム

神——イサク

神——ヤコブ

ここに於てはアブラハム、イサク、ヤコブは血縁の上下に連るのではなく、彼らは直ちに平等なる人格として神に結ばれている。

イスラエルの救済史上に於ける血縁の意義は失われた。

イエスキリストの福音が伝えられたのはイスラエルではなかった。それは異邦人へであった。これはパウロの一大懷疑であった。

ローマ人への手紙の九章から十章まではこれへの解答である。

旧い時代に於ては神の救の約束は選民に優先された。新しい時代に到つては選民と異邦人とはその秩序を転倒した。

しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう。

マタイによる福音書、一九三〇

これも亦自他共に生粹のヘブル人を以て許したパウロには一大異変であった。

パウロはここに於ても亦一切の既得觀念を放棄しなければならなかった。

彼は神に人類救済の計画を見出した。

そうしてその人類救済の計画に神独自の自由を承認した。ペテロに人

の千年は神の一日でありまた神の一日は人の千年に当るように、パウロにも神の救は人の時の前後を超えた自由と恩恵と知恵からであった。

かくして旧約時代¹に於ける選民から異邦への神の救いの計画は新約時代に於ては異邦人からイスラエルへと転ぜられた。

これは神の救いの自由な計画である。

しかし他面それはまたイスラエルの蹟に対する神のさばきからでもある。

彼らは不信仰のゆえに切り去られ、あなたは信仰のゆえに立っている。高ぶった思いをいだかないで、むしろ恐れなさい。ローマ人への

手紙、一一、二〇

神の救いの計画の時——これには人間の側から呼びかけの余地が与えられている。

一一

原始キリスト教会はキリストの再来を待望した。パウロもこの意味に於て原始キリスト教会の子であった。

わたくしたちが併しパウロを経てヨハネに来る時、キリスト待望が著しくその影を秘めていることを発見する。

少なくともヨハネによる福音書の主題はイエスの再来ではない。これの中心主題は受肉のロゴスと永遠の生命である。因にヨハネによる福音書が書かれたのは九十年以後であろう。

パウロは救の成就をキリストの日に期待した。パウロの救はこの意味に於て未来性であった。

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。そ

れは御子を信じる者がひとりも滅びないで永遠の生命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは世をさばくためではなく、御子によってこの世が救われるためである。

彼を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれている。ヨハネによる福音書三、一六、一八

以上の章句によればさばきとすくいとはキリストの日を待つこのことではない。それは未来に属する未知の事ではなく、正に現在に属する既知のものである。

よくよくあなたがたに言っておく。

死んだ人たちが神の子の声を聞く時が来る。ヨハネによる福音書五、

二五

この一節はキリストの日に於ける死者の復活の予告である。しかし著者はこの句に続いて、

今すでにきている。

と予告の成就を宣言している。

筆者はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神の名辭の連系に於て救済史の一つの構造に触れた。

すなわち神に対してアブラハム、イサク、ヤコブは夫々独立した別個の人格として直結した。

あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでゐた。そしてそれを見て喜んだ。八、五六

一般に人は救いの成就をキリストに於て殊にキリストの特定の日に期

待する。

若しこれが真であるなら、キリスト以前の人々の救は如何にとは各時代の基督者の秘められた疑問であつた。

ヨハネによる上の章句はアブラハムの救を保証するものではないか。

一方上掲の章句に於てわたくしたちに示されるものはアブラハムの現実の人格である。

ヨハネにあっては過去は過去でない。未来は未来ではない。これらはいずれも永遠の今である。

ヨハネに於て過去未来を永遠の今に包摂させるものは何であろうか。

初めに言葉があつた。言は神と共にあつた。

言は神であつた。すべてのものはこれによつてできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。

この言に命があつた。そしてこの命は人の光であつた。光はやみの中に輝いている。

そしてやみはこれに勝たなかつた。一、一一五

これはヨハネの神観でありまた信仰告白である。ヨハネには神とキリストとは二位一体の神格である。そうして万物の創造歴史の支配はこの二位一体の神によるものであつた。

時は永遠に連る。人は容易くかく云う。

では永遠の実体は何であろうか。

永遠の生命とは唯一の、まことの神でいますあなたとまたあなたがつかわされたイエスキリストを知ることであります。一七、三

ヨハネが永遠とその生命について証するものは以上の言葉である。

一一一

イエスキリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない。ヘブル人への手紙一三、八

ヘブル人宛の手紙の発信人は不明である。

その成立はヨハネの福音書の場合とほぼ同じであろう。

所掲の一節はイエスキリストの永遠に於ける自己同一のあかしである。ここにこの手紙の作者はヨハネと軌を一にしている。しかしこの手紙

の基調はヨハネの場合のように静謐ではない。それはむしろ主の日に備に戦々競々するパウロの緊張を想わせる。

なおそれは旧約と新約、律法と救いとを対立させているところにその発信者をパウロと連想させるものがある。

ヘブル人への手紙にはしかし時に關する一回性が鮮明に打ち出されている。

大祭司は年ごとに、自分以外のものの血をたずさえて聖所にいるが、キリストは、そのように、たびたびご自身をささげられるのではなかった。もしそうだとすれば世の初めからたびたび苦難を受けなければならなかつたであろう。しかし事実、ご自身ないけにえとしてささげて罪を取り除くために、世の終りに一度だけ現われたのである。そして一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることが人間に定まっているように、キリストもまた、多くの人の罪を負うために、一度だけご自身をささげられた後、彼を待ち望んでいる人々に、罪を負うためではなしに二度目に現われて、救を与えら

れるのである。九、二五—二八

事件は同等である。しかしそれを構成する意味は全く異なる。かかる角度からの記述が既に旧約聖書に見られるのである。

モーセによってエジプトを脱出したイスラエルは荒野で渴を医すため磐を撃った。(出エジプト記一七、一—七)

この同一行動がモーセによってチンの曠野でとられた時、前回に於けるイスラエルの祝福は此度は呪いに変った。(民数紀略二〇、七一—二二)

キリストは死人の中からよみがえらされて、もはや死ぬることがなく、死はもはや彼を支配しないことを知っているからである。なぜならキリストが死んだのはただ一度罪に対して死んだのであり、キリストが生きているのは、神に生きているのだからである。ローマ人への手紙六、九—一〇

イエスは死んだ。しかし彼の死は人類のすべての場合とその意味を異にする。

彼の死がその意味に於て一回性であった。

パウロはかく主張する。因にパウロがここに用いて一回を意味する原語 *ἐνθάδε* はこれを除けばヘブル人宛の手紙に結集している。

ユダヤ人は年毎にヤハウェにいけにえを捧げた。これはユダヤの年中行事であった。

しかしこの年中行事はユダヤ人に何をなしたであろうか。それは彼らの罪意識の深化であった。いけにえは回復された。回復は試行と錯誤との交錯である。試行が錯誤に対し克服の立場をとらなければ、回復は情性と化する。

これはユダヤ人のいけにえに就て正しく妥当した。

イエスは死んだ。彼は彼自らをいけにえにした。彼の死はユダヤ人のいけにえの回復を止揚した。この手紙の発信者にはイエスの死はこの意味に於て一回性であった。

一方いけにえは旧約時代に於ては贖いへの欲求または憧憬であった。それは決して贖いへの応答またその成就ではなかった。

イエスの死はこの手紙の発信者には贖いへの応答またその成就であった。

錯誤と試行の止揚としての一回性は低さから高さへの次元の飛躍である。

この時、高さに飛躍した次元はしかしその永続が保障されるであろうか。人はここに於ても亦再び錯誤と試行の交互の回復に帰るのではないであろうか。歴史に於て回復性が否定され、一回性が肯定されるのは飽くまで相対的意味に於てであって絶対的のそれに於てではないのはこの理由からではなからうか。

しかしキリストがすでに現われた大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおるかつやぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。九、一一—一二

いったい、律法はきたるべき良いことの影をやどすにすぎず、そのものの真のかたちをそなえているものでないから、年ごとに引きつづきさげられる同じようないけにえによっても、みまえに近づ

いて来る者たちを全うすることはできないのである。

へブル人宛の手紙に於ては一回性は相対的な次元から次元への飛躍ではない。

これは影から本体、時代から永遠への転回である。

これに歌われている一回性は相対的ではなく絶対的である。ここに於ては反復は永久に否定されている。

人は作る。しかし人は作られたものに支配される。人は業の主である。他面業は人の主でもある。

人は死ぬ。業はその主を捨てる。業は技術的に反復される。人の意味は業に存する。

へブル人への手紙にはイエスは贖う人、否贖自体である。贖い——これはキリスト以外の何人もこれに代られない。

一二

新約聖書はヨハネの黙示録を以て終っている。

この著者はヨハネとは直ちに断じられない。

この書が書かれたのはローマの皇帝ドミチアヌス (Domitian 51-96) の時世である。

基督教伝播当初に於けるローマ帝国の寛容政策はこの時代に至り俄然弾圧政策に変わった。

基督教徒にはこれは正に一大異変であった。

そうしてこの異変こそは正に神の国誕生の生みの苦しみであった。

五旬節に誕生した原始キリスト教会のパルシアはこの書に於て最高

潮に達しているのではなからうか。

ローマ帝国のキリスト迫害は基督教者の生命を怖かした。彼らには地上は文字通りサタンの国である。この書は黙示文学の形体に於て天国と地上との著しい対比を巧に描いている。

天国また神の国に対するサタンの王国はローマ帝国である。

天のエルサレムとバビロン。キリストとカイザー。ミカエルと龍——これにわたくしたちは神の国と地の国との激しい対立が描かれているのを発見する。

一方天は地と呼応する。

天に於ける七つの星は地の上の七つの燈台に相照応する。

地上に居られた聖徒の祈求は天から応えられる。

神の国成就のプログラムの進行の背後には神の国と地の国の聖徒らの呼応が営まれている。

神の国の来臨は焦眉に迫っている。

しかしサタンは跳梁してその来臨を延引をたくらむ。

「今や、われらの神の救と力と国と、

神のキリストの権威とは、現れた。

われらの兄弟らを訴える者、

夜昼われらの神のみまえて彼らを訴える者は、投げ落された。

兄弟たちは

小羊の血と彼らのあかしの言葉とによって、彼にうち勝ち

死に至るまでもそのいのちを惜しまなかった。

それゆえに、天とその中に住む者たちよ、

大いに喜べ。

しかし、地と海よ、

おまえたちはわざわざいである。

悪魔が、自分の時が短いを知り

激しい怒をもつて、

おまえたちのところに下ってきたからである。

一二、一〇—一二

サタンの時は短い。サタンは審かれる。

聖徒の忍耐が要望される。

倒れた、大いなるバビロンは倒れた。一八、二

バビロンはローマの象徴である。

かく聖徒の迫害の後に約束されるものは上からのエルサレムの来臨である。

わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り海もなくなってしまった。また聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。二一、一—二

結 尾

イエスの死とよみがえりは初代キリスト教徒には一大異変であった。

彼らはこれに世の終りを直覚した。

イエスの死とよみがえりは少数者の精神革命を促した。しかし一般世界の外部構造には少しも加えるところがなかった。

他方信徒にイエス再来の待望は応えられなかった。

彼らが失望、疑惑、懷疑そうして不信の課程を辿るのは当然である。

彼らのバルーシアは云わば自己分裂に陥った。これは文字通り初代キリスト教会の一大危機である。

新約聖書のいずれの書もかかる危機の克服を事件としたものである。

救の時の問題は彼らに緊急であった。

彼らの救は時に關していた。時に於てであった。

そうして時を通してであった。

人は一般にイスラエル宗教には来世観念がないと云う。しかしこれの意味するところは余りに不問に附せられがちである。

それは彼らが救の非時間化に対しては無縁であったと云う事ではないか。これはそのまま新約聖書の場合でもある。

一方原始キリスト教徒はイエスの死とよみがえりに於て神の国の成就を感受した。この時代彼らを支配したものはバルーシアの詩的情感であった。

パウロは神の国の到来を確認した。彼にはエロス(eros)化されたアガペエ(agape)が躍如としていた。

彼の信仰は展望的に前進していた。

ヨハネには神の国が地の国を包越していた。

彼はロゴス(logos)化されたバトス(batos)に立脚した。

彼は観想的に漸進した。

ヘブル人の手紙の記者には神の国は地の国に連続していた。彼は信仰のパラドックスとアナログアとを止揚した。彼は救の歴史的把握者であ

った。

終にヨハネ黙示録の著者には神の国と地の王とは具体的に対立した。

彼はキリストの前に *entweder oder* の立場に置かれ *sowohl—als* のそれは許されなかった。

彼は終末の実存者として終末的決断を迫られたのであった。

参 考 文 献

NOVUM TESTAMENTVM GRAECE ET GERMANICE 14 Auflage
Dictionary of the Bible by, J. Hastings
Das heue Tastament übersetzt von Ludwig Allvecht
聖 書 日本聖書協会